憧憬の詩人ラモーン・カバニージャス散歩道
O paseíño do poeta arelado Ramón Cabanillas

浅　香　武　和

はじめに

ラモーン・カバニージャス(1876-1959)は、スペインガリシア州ポンテベドラ県カンバードス市フェフィニャンス区で生まれた。1912年キューバへ移民、1913年ガリシア語による処女作 *No desterro*『故郷を離れて』をハバナで発表した。1915年に帰国、その後、14冊の作品を著した。

私が初めてカバニージャスのことを知ったのは、1990年サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学において開催されたガリシア語学文化講座のなかでアロンソ・モンテーロ先生が担当された近代文学概論の講義であった。私はガリシア文芸復興の立役者ロサリーア・デ・カストロについては少し知っていたが、ラモーン・カバニージャスの名前と作品を聞いたのは、この時が初めてであった。早速、ガラクシャ出版発行の『詩のアンソロジー』(*Antoloxía poética*, Vigo, Galaxia, 1983)を買い求め読み始め、それ以降カバニージャスの生まれ故郷カンバードスの町に毎夏通うようになった。

このエッセイは、憧憬の詩人さらには民族の詩人と称されるカバニージャスが詠んだ詩を味わい、その舞台となったカンバードスの町とその周辺を逍遥するものです。

カバニージャスのモニュメントと詩の風景

1 カルサーダ公園にて Na Calzada

カンバードス市内のカルサーダ公園には、カバニージャスの友人で同郷の彫刻家アショレイがデザインしたカバニージャス顕彰碑が詩人の死後の翌年1960年に建立された。この作品の石材はピナール・デ・トラゴベとパストーラ山から切り出された上部は尖塔形の自然石で、台座は正方形に加工され組み合わされた3メートルほどの高さがある。

正面には詩集 *Vento mareiro*, 1915『海からの風』と *Da terra asoballada*, 1917『威圧された故郷から』の冒頭に記されたカンバードスに捧げた6行が大文字で刻まれている。

A TI, MEU CAMBADOS
PROBE E FIDALGO E SOÑADOR
QUE, O CANTAREIRO SON DOS PINALES
E O AGARIMO DOS TEUS PAZOS
LEXENDARIOS
DORMES DEITADO O SOL
A VEIRA DO MAR

あなたに、私のカンバードスよ
貧しいひとも郷士も夢想家も
松林の歌うような響きに、そして
由緒あるお屋敷の慈しみに
日の光が注いだ海辺で
眠りなさい

この冒頭の6行は、カバニージャスがキューバに移民して望郷の念から認めた故郷カンバードスへのオマージュである。

もう一つ『威圧された故郷から』1926, 第二版から「カンバードスのカルサーダ公園」をあげる。

Sol de vran. O mar de Arousa,
de praia a praia tendido,
canso de loitar, repousa.
Ceo azuado e senlleiro.
Limpou de néboa á Curota
o maino vento mareiro.

Alá, na boca da ría,
dende a solana da costa
o Con de Noro vixía.

夏の太陽。アロウサ湾の海、
砂浜から砂浜が広がった
争いに疲れ、休む。
青く孤独な空。
クロタの山から霧が晴れた。
柔らかな海風。
彼方、入り江の入り口に、
海岸の日だまりから
ノロの岩が見張っていた。

2 市役所前の広場 Na Praza do Consistorio

広場のベンチに座るカバニージャスのブロンズ像がルーカス・ミーゲスにより 2009 年に制作された。右手にペンを持ち、見開いた眼はアロウサ湾を眺めているようだ。"Ó sol, á veira do mar" de Cambados. Ramón Cabanillas「太陽に向かい、カンバードスの海辺で.ラモーン・カバニージャス」と署名する座像がある。

そこにあるプレートには、次のように刻まれている。

D. Ramón Cabanillas
Poeta cambadés e galego universal
1876-1959
Concello de Cambados no
50 aniversario de seu pasamento.

カバニージャス没後五十年を記念して、2009 年に金属プレートが埋め込められた。「カンバードスの詩人そして世界のガリシア人 1876-1959 没後五十年　カンバードス市」。

カンバードスには世界で活躍する彫刻家がいる。古くは、カバニージャスの友人のフランシスコ・アショレイ、現代の石彫刻家にマノロ・パス、彫塑にフランシスコ・レイロがいる。市内のカルサーダ公園の入り口にアショレイに捧げたルーカス・ミーゲス作のブロンズ像「彫刻家フランシスコ・アショレイ」、さらにレアル街に面した小さなフランシスコ・アショレイ広場にはアショレイの弟子ショセ・カオ作の石彫「母」、カバニージャス広場にはレイロ作「酒の神バッカス」のブロンズ像がある。これらの作品を見て歩くのも楽しい散策だ。友人のモンチョの案内で、カンバードスの郊外にあるレイロとマノロ・パスのアトリエを訪ねたことがある。レイロは石彫とブロンズの両方の作品を制作している。一方、パスは広大な敷地に大きな石の作品を展示しているので野外で鑑賞することができる。パス氏が最近完成させたコルーニャ市ヘラクレス灯台公園の作品「メニーレス」は 11 本の巨石を配置したモニュメントは圧巻される。

カバニージャスの友人フランシスコ・アショレイは世界で活躍する彫刻家だ。多くの作品があり、私の記憶のなかにはサンティアゴ・デ・コンポステーラにある大作「天を仰ぐアッシジの聖フランチェスコ像」(1926~30 作)、コルーニャ市のメンデス・ヌーニェス公園内の「詩人クーロス・エンリーケス像」(1934 作)、リアンショ市の旧埠頭にある「聖グアダルーペ」(1929 作)、ルーゴ県のサモス修道院中庭の「フェイホー神父像」(1947 作)がある。カバニージャスは 1948 年頃にベネディクト会サモス修道院僧房に滞在しながら詩作に励み、10 年後に『サモス』を発表している。フェイホー神父像はカバニージャスとアショレイとフェイホー神父の友好関係から生まれたものであろう。

3 市立図書館 Biblioteca Municipal Luís Rei

この図書館は、19 世紀半ばに造られたカンバードスの豪商フラガ家の邸宅であったが、2005 年カンバードス市に移譲され、2010 年から市立図書館となり一般に公開されている。2015 年にはカバニージャス研究に打ち込んだ文化担当職員故ルイス・レイ氏の名を冠している。『ラモーン・カバニージャス。追放と郷愁の歴史』(Luís Rei: *Ramón Cabanillas. Crónica de desterros e saudades*. Vigo, Galaxia, 2009) の大作がある。入口には A ti, meu Cambados, Ramón Cabanillas と本の形に成型した石に彫られている。さらに、中庭にでると E TI / CAMBADOS / A ALMA MIÑA / ENCERRA /

TEU CARRIÑO / NUN BERRO / MIÑA TERRA! / R. Cabanillas そして お前 / カンバードスよ / 私の魂は / お前の愛情を / 叫び声のなかに / 包む / わが故郷！/ ラモーン・カバニージャス（『時の流れ』*Camiños no tempo,* 1949 より）

書庫にはカンバードスの歴史家でガリシア学士院会員カアアマーニョ・ボウナセル Caamaño Bournacell が著したカンバードスを知る貴重な書籍が所蔵されている。数年前に『カンバードス歴史の光に』（*Cambados á luz da historia,* 1933）を閲覧することができた。私は 2011 年夏、小著『憧憬の詩人ラモーン・カバニージャス』のプレゼンテーションをはじめてこの図書館の中庭でおこなった。そしてカバニージャスの孫娘ピトゥウサ夫人と知り合うこともできた。その後、夫人の住まいを訪ねカバニージャスコレクションを拝見する機会に恵まれた。

幸運にも私は第十六回ラモーン・カバニージャス文学賞 2019 を受賞することになった。まず 7 月 26 日午後 8 時から、この図書館の中庭で私が今年の五月に翻訳したカバニージャスの『百葉の薔薇』（Ramón Cabanillas, *A rosa de cen follas*）の新作発表を行った。カンバードス市長臨席のもと、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ガリシア語学科教授フランシスコ・フェルナンデス・レイ、ラモーン・カバニージャス書店主ラモーン・ドミンゲス、ラモーン・カバニージャ孫娘ピトゥウサ夫人出席により夕方の涼しい中庭でトークショーが始まり 2 時間があっという間に過ぎてしまった。翌日はカンバードス市公会堂で授賞式に臨んだ。授賞理由は、著書一点、翻訳詩集一点、小冊子一点、研究ノート一点、演奏会二回［ラモーン・カバニージャスに捧げる、カバニージャスとガリシア語の詩へ］（共演ソプラノ芳賀美穂、ピアノ西川理香、ピアノ山上有紀子）、口頭発表三回の業績はカバニージャスを世界に広めたことに値するとのことである。本来ならば授賞式はカバニージャスの誕生日 6 月 3 日に開催されるのが通常であるが、私の都合で日程の変更に至った。オープニングセレモニーは、ガラシェ演劇集団によるカバニージャスの詩の朗読で始まり、カンバードス市長の挨拶、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学教授フェルナンデス・レイによる受賞理由の説明、カバニージャス書店主ドミンゲスとシンガーソングライターケビン・アラグンデのギター伴奏でカバニージャスの詩の語りと歌、文学賞贈呈式、最後に私の受賞御礼のことばで締めくくった。その後、パラドールアルバリーニョの大食堂に移動して晩餐会が催された。出席者は親しい友人や親族 30 名ほどで、ガリシア料理の粋を極めたエンシェブレ・メニューが振舞われた。

『百葉の薔薇』発表とカバニージャス文学賞のポスター（2019.7 カンバードス市）

4 オスピタル通りにあるカバニージャスが晩年住んだ家 Casa na Rúa Hospital

Nesta casa viviu os derradeiros días da súa vida
Ramón Cabanillas
O poeta das Irmandades da Fala
Cambados a 9 de novembro de 2015
No centenario de *Vento Mareiro*

「この家にラモーン・カバニージャスは晩年の日々住んだ　言葉の友好協会の詩人」と金属プレートに彫られている。この記念碑は、彼の代表作『海からの風』出版百年にあわせて、ガンバードス市が 2015 年 11 月 9 日に住居の入り口に設置したものである。カバニージャスは、晩年この通りの娘夫婦の家に住んだ。6 月の聖体の祝日 Corpus には、オスピタル通りは色とりどりの花で配らった花の絨毯と呼ばれる絵巻物を鑑賞できる。

5 ラモーン カバニージャス生誕記念館

Casa-Museo Ramón Cabanillas

フェフィニャンス区ノビタデス通 13 番地に詩人の生家がある。石造り二階建てのこじんまりした漁師風建築だ。漁師の家に生まれたカバニージャスは、ここから小学校に通っていた。1998 年 7 月に改装され現在市立博物館となっている。二階入口の玄関には、次のように長方形の石に刻まれている。

NESTA CASA NACEU RAMON CABANILLAS
POETA DA RAZA
1876-1959

「この家にラモーン・カバニージャスが生まれた　民族の詩人 1876-1959」。館内は狭いがカバニージャスの書斎が再現されている。1907 年に刊行した新聞 El Umia、愛用したタイプライター、ガリシア学士院入会記念のメダルなどが展示されている。

小学生時代の思い出を『海からの風』1915 から「黄金の夢」の第一節をあげる。この詩は、妻のエウドシアに宛てたもので詩集の最初に収められている。

¡O meu sono labrego!
Unha casiña preto do río,
ó abrigo dos pinares,
con piorno e albois nos currales
e palleiros na eira e na curtiña...

私の夢は農夫！
川のそばの小さな家、
松林に守られて、
中庭には穀倉と小屋
畑には藁の山、そして菜園には…

さらに、『海からの風』1915 から「土曜日の学校」と題する詩の第四節をあげる。カバニージャスはカンバードスのフランシスコ会修道院の附属小学校に通っていた。30 年以上経ち、その思い出を詩に詠んでいる。

¡Ou paredes! ¡Ou baranda
da escala longa e estreita
do patín! ¡Ou ventaniñas
claras, ridoras, abertas
sobre da horta do antigo
convento! ¡Como se espella
na alma, como arrecende
o recordo, esa roseira
sempre frorida que loce
máis rosas canto máis vella!

おお壁よ! おお中庭の長く
狭い階段の手すりよ!
古い修道院の
菜園の上に
明るい、和やかな、
開いた窓よ!
心の中に映る、
思い出が香る、
その薔薇の樹は思い出、
いつも花咲くその薔薇の樹は
古いほど薔薇が輝く!

6　サン サトゥルニーニョ塔 Torre de San Saturniño

アロウサ湾の入り江にあり、10 世紀から 11 世紀にバイキングの攻撃から防御のために造られた要塞で、現在は朽ち果て塔のみが残っている。この詩は『カンバードスの歴史記念物』に見えるが、もともとはカバニージャスが友人のサンチェス・ペーニャに宛てたもので 1925 年頃の作。未発表だがよく知られているので全集には収められている。

Torre de San Saturniño,
veira do mar sobr-os cons,
¡Ti caes pedriña a pedra
y-eu ilusión a ilusión!

サン・サトゥルニーニョの塔よ
海辺の岩の上に、
おまえは小石が一つずつ崩れ落ち
そして、私には幻想がめぐる。

Sindo Mosteiro: *A torre e a sombra.* Cambados, 2018.この本『塔と影』はカンバードスの歴史とこの塔の写真を四季折々の様々な角度から撮影し、70 に及ぶ塔を詠んだ詩が収められている力作だ。

現在はリアス式のアロウサ湾岸に遊歩道が整備され、この塔からセカ水車小屋までのコースは 9 キロメートルあり 2 時間もかけてゆっくり散歩するには風光明媚なところだ。サントメー地区にあるカンバードス産の新鮮なサンプリーニャ貝(小型のホタテ貝)をレントラン「ピントス」で味わうことができる。

Camiños no tempo, 1949『時の流れ』に所収されている「カティコバスのお屋敷」Casal de Caticovas のなかにもこの塔のことがうかがえる。

Torre de Santomé sóbor da praia,
por un milagre de dolor sostida,
onde unha reina seus amores laia
no misterio da noite estrelecida!

浜辺に聳えるサントメーの塔
心痛の驚異に支えられて、
そこは挫折した夜の神秘のなかに
一人の王妃が愛を呻く。

7 墓誌 Epitafio de San Domingos de Bonaval

カバニージャスの遺骸は 1959 年 11 月にカンバードスの墓地に埋葬されたが、1967 年 8 月 12 日にサンティアゴ・デ・コンポステーラ市の聖ドミンゴス・デ・ボナバル教会内の高名なガリシア人の霊廟 Panteón de galegos ilustres に移送された。この霊廟は、ロサリーア・デ・カストロをはじめとしガリシアの偉人や英雄を祀っている。カバニージャスの遺骸が移送されたが 50 年余り墓誌は刻まれることはなかった。カンバードス出身でサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学教授、ガリシア学士院会員のフェルナンデス・レイ氏が再三にわたりボナバル教会ならびにガリシア政府に故人を顕彰する墓誌を墓石の上に刻むことを請願していた。そして 2018 年 6 月 16 日、終に墓誌が刻まれた。この時カバニージャスの孫娘ピトゥサ夫人は紅白のバラを墓前に捧げた。

墓誌に刻まれた詩は、『海からの風』から「黄金の夢」の第 6 節の Encomenda「委託」、A ti, miña muller「おまえに、わが妻」の末尾の 3 行である。

Quero na lousa que me de sosego
esta palabra que ten luz: 《Gallego》
e esta palabra que ten ás: 《Poeta》.

墓の中で私に安らぎを与えてほしい
光輝くこの言葉「ガリシア人」
そして翼をもつこの言葉「詩人」。

8 モンダリス　Mondariz Balneario

ガリシアでモンダリスといえばミネラルウオーターが思い浮かぶ。ポルトガル国境の町だ。この町にジャーナリストの友人と訪れたことがある。あちこちに水が湧き、水の町と保養所で知られている。12 世紀に建造されたソブローソ城からはポルトガルを眺めることができる。

カバニージャスは 1920 年から 29 年の間、ポンテベドラ県モンダリス市の文化担当官をとして勤務し、また詩作に勤しんだことから、その記念に市役所が最近になり掲げたプレートがある。

En lembranza do poeta da raza
Don Ramón Cabanillas,
Que foi concelleiro da Corporación
Desta Vila en 1929.
Concello de Mondariz Balneario-Foro E. Peinador

民族の詩人の追憶に
ラモーン・カバニージャス
1929 年この町の自治体の参与であった
モンダリス・バルネアリオ市 エンリーケ・ペイナドール管轄

カバニージャスがシャブリーニャ川を詠った石碑の除幕式が 2019 年の 4 月 22 日に行われたので、ここにあげておきたい。この作品は、全集には収められていないので、おそらく友人のペイナドールに宛てたものかと思われる。1927 年にモンダリスで刊行されたカバニージャスの作品『百薬の薔薇・ある愛の祈祷書』の肉筆原稿(1926.3)もペイナドールに献辞されている。ペイナドール氏の死後、原稿は遺族がガリシア学士院に寄贈している。

"Regueiriños de prata do Xabriña
onde as adoas da agoa cristaiña
son perlas do locir,
¡si é que se vai mollar na vosa
escuma,
sin enxoiar de cores a súa pruma
non o deixedes ir!"
Ramón Cabanillas

「シャブリーニャの銀の小川
水の結晶はビーズのような
光輝く真珠、
お前たちの泡に
濡れるようならば
ペンは色を飾ることなく
流れ続ける!」

ガリシア州ポンテベドラ県モンダリス市は、ガリシアでも最もバランスのよいミネラルウオーターを 1873 年から産出している。当初から病院など保養施設で健康維持のために飲用され、現在ではモンダリス水はガリシアでは一番人気のブランド水となっている。カバニージャスは 1920 年から 29 年の間モンダリスに滞在して多くの詩作活動をすすめ、モンダリスの保養施設開発に尽力したペイナドール氏と友好関係を結んでいる。モンダリス水の最新の成分表示から算出すると硬度 51mg/L である。私はガリシアに滞在しているときは、成分バランスの良いモンダリスの水を愛飲している。

9 アルメンテェイラ修道院 Mosteiro da Armenteira

このシトー会派修道院が歴史の上で最初に現れるのは 1162 年であり、13 世紀に編纂された『聖マリーア頌歌集』(*Cantigas de Santa María*)の 103 番にこの修道院を詠った「修道士と小鳥」がある。幸いにもこの修道院を訪ねた時に案内付きの見学会があったので参加した。院内から教会をゆっくり歩きながらの訪問は心を和やかにするものだった。その後、一人で再び訪れると悠久の歴史の流れを感ずることができる。売店では修道女が作ったバラやハーブの香りの石鹸を買い求めることができた。石鹸はガリシア語では xabón シャボンまたは xabrón シャブロンと言われる。ラテン語 sapōne から進展したものだ。日本語のなかにはポルトガル語 sabão の音写で外来語として移入され「シャボン」として使われていた。私の祖父はいつも風呂に入るときには決まってシャボンと言っていた。今ではこのことばをつかう人は少なくなり愛着を感じる。石鹸やソープよりも異国情緒があることばだと思う。

カバニージャスは「修道士と小鳥」を念頭において、次の作品をあらわした。

O paxaro de Armenteira
Oíndo o canto dun paxaro estivo
trescentos anos, - como o lin o escribo-,
i ó chegar ó mosteiro de retorno,
o novo monacal coro ademira
que o anaco de pan con que saíra
tres sigros antes … inda estaba morno!

アルメンテイラの小鳥
「私がそれを読み書くように」、300 年
修道院は小鳥の歌声を聞いていた、
そして再び修道院に到着すると、
新たな修道院の聖歌隊は賛美する
三世紀も前にできた
パンのかけらが…まだ温かった！
『故郷を離れて』1913, *No desterro.*

10 パストーラ隠修道 Ermida da Pastora

パストーラ隠修道は、カンバードス市内から北に20分ほど歩いたところにある小高い山の上にある聖母パストーラを祀る。カーサ・マリニェイラ・ルルデスから小高い丘を登ったところに聖母パストーラは祀られ8月の第三日曜に祭礼がある。ここにあげる詩はカバニージャスが少年のころの思い出を詠んだものだ。初出は不明であるが、1959年にブエノス・アイレスで発行された全集には所収されている。その中で、特に興味深いのは詩の中に家族や親しい友人の渾名を織り込んであることだ。今でも、カンバードス市内を散歩していると市の掲示板に渾名で訃報の知らせが貼ってあるのを目にすることがある。普通は人名を記しているが、カンバードスでは渾名を使用している。Chicán, Rato, O Pesquello, Trunfo, O Vagho などがある。いわゆるニックネームだが、その由来は外国人の私には正確にはわからない。最後の O Vagho は、さしずめ「怠け者」ということであろう。ガリシア西部地域の顕著な音声現象ヘアーダ[g]を[h]のように咽頭無声摩擦音で発音することで、vagho[báho]のように表記している。O は人名定冠詞というものでガリシア語では親愛感を表すためにつける。渾名を詩に取り入れたのは、カアアマーニョ・シルバの "A rebeira de Cambados"（1885）「カンバードスの海辺」が最初で137の渾名が出てくる。私はカンバードスへの何回ものの訪問で女性の渾名、Chicha や Xenxa という方と知り合いになった。小さな町の共同体のなかで生きている彼らは親密感を表すために渾名を選んだのであろう。それは、ガリシア人に多い名前、女性はマリーア、カルメ、男性はショセ、マノーロなどの洗礼名が多すぎて区別できないことによる命名法なのかもしれない。

As tardes na Pastora
Do vran nas tardes longas, con merenda
nun cestiño de vimbias,
devagar, paso a paso, baixo a soma
do roxo parasol de miña tía,
rubía á fresca, umbriza carballeira
que coroa un outeiro a par da vila,
onde se erugue, feituca como un ovo,
da Virxe da Pastora a branca ermida.

パストーラの午後
夏の長い午後、
籐の籠にはおやつ
ゆっくりと、一歩一歩、
私の叔母さんの
赤い日傘の影の下で、
さわやかな空気のなかを登り、
丘の二つの別荘を覆うナラ林の影、
卵のかたちをして聳える
聖母パストーラの白い隠修道。

11 カバニージャスのワイン O viño de Cabanillas

カバニージャスにとってのワインはアルバリーニョにちがいない。このワインを un viño olímpico と表現している。形容詞オリンピコをワインにつけるのは珍しい。おそらく白ワインのアルバリーニョと他のワインを競わす意味で使ったのであろう。『詩のための交唱聖歌』（*Antifonia de cantiga*, 1951）のなかで、カバニージャスはアルバーリョワインとファレルノを比較し、さらにサシナのチーズ、ピセノのオリーブ、パロスの大理石、チロスの良質のワインをクンカ（杯）で飲み干すことについて触れている。『海からの風』1921の「黄金の夢」第三節のなかで、Todo ó longo da aberta do muiño / tortas e vellas cepas de albariño / cos asios mestos no bendito outono.
「水車小屋からずうっと開けた、アルバリーニョの捻れた古い株、実りの秋に濃い酸味を醸し出す」とある。

かつてカンバードス市カストレロを流れるウミヤ川の傍にあるサン・マルコスホテルに滞在したことがある。ホテルのロビーにカバニージャスの詩が掲げられているのに気が付いた。調べてみると『威圧された故郷から』（*Da terra asoballada*, 1926）の最初の一節である。

Diante dunha cunca de viño espadeiro
O espadeiro! Asios mouros, cepas tortas,
follas verdes, douradas e vermellas,
gala nas terras vivas de Castrelo,
nos Casteles de Ouviña e nas areas
de Tragove e Sisán, do mar de Arousa
e o Umia cristaíno nas ribeiras!

エスパデェイロワインの杯を前にして
エスパデェイロ! 濃厚で酸味がほどよい!
曲がりくねった葡萄の樹は緑、黄金色
そして紅くなった葉をつける
オウビーニャ村のカステレスとカストレロは
活気ある土地
アロウサ湾のトラゴベ、シサーンの砂浜
水晶のようなウミヤ川も晴れ着をまとったようだ！

この詩の中に地名があらわれているが、それは土地への愛、人間の仕事への愛、伝統への愛が込められている。詩の中に地名を織り込むのはコウレルを詠んだウシーオ・ノボネイラの詩集『オセイドス』にも通ずるものがある。

カンバードス市のカストレロ地区は、今では白ワインの宝石と称されるリアス・バイシャスの絶品アルバリーニョワインを生産するが、かつては赤ワインのエスパデェイロを生産していた。現在生産高は少ない。それでも庶民のいくバルには無印の赤ワインが置いてある。パストーラ通りを散歩していると「ワイン販売」の張り紙があったので、中に入ってみると二人の農夫(ルイスさんとサンティさん)がグラス片手におしゃべりしているところだった。この二人は、私が定宿にしているカーサ・マリニェイラ・ルルデスのテラスで飲んでいた顔見知りの二人だった。宿のオーナーのルルデス夫人の知り合いだ。早速、アルバリーニョワインの話をすると、白はないが赤ならあるというのでエスパデェイロ飲んでみたいと言うと、バランテスならあるというので一杯いただくことにした。カバニージャスが言うように濃厚で添加物が混入されてない素朴な味で、度数は白より低いとうことだ。この農夫が話しているガリシア語は、私の思った通りヘアーダ話者である。ヘアーダとは g [g]の音を帯気音化する音声現象で、この 2 人は咽頭摩擦音であった。近年では軟口蓋閉鎖音を使用する人もいる。

もう一つ葡萄の収穫期の詩をみてみよう。初出は『モンダリスの時代』(1930)

Vendimia en Salnés
Salnés antergo e saudoso, terra sagra e petrucial
farta de séculos, chea de amor e dolor de nai.

Carreteiriño das uvas
déixame rubir ó carro
carreteiriño das uvas
heiche pagar o traballo.

Terra de Salnés. Outono. A caída do serán
Os carros na correidora, chirra que te chirrarás.

サルネースの葡萄の収穫
古い郷愁のサルネース、聖なる由緒ある土地
母の愛情と悲しみにあふれ、何世紀も惹きつける。

ブドウの小道
私を荷車に乗せて
ブドウの小道
仕事に報いたい。

サルネースの土地。秋。日が落ちるころ
通路の荷車は、お前が唸るようにうなる。

カストレロはサルネース地区に属する地域で、リアス・バイシャスの原産地呼称でアリバリーリョ種のブドウの栽培が盛んだ。2700 ヘクタールの栽培面積があり 180 のワイナリーがある。その中心地がサルネースだ。カバニージャスもワインの愛好家であり、アルバリーニョワイン祭大会名誉委員長を務めている。この詩は 1930 年に雑誌『モンダリスの時代』に「秋」という題で発表されたものであ

る。Albariñoはラテン語*albāre「白い」にガリシア語の縮小辞 iño を付加して作られた語である。名前のように白く軽い、酸度は高くアルコール度数は 12 から 14 パーセントである。とくに有名な銘柄はマルティン・コダックスであろう。カンバードス市ビラリーニョにある本社では、毎週木曜日の夜にガリシア音楽を楽しめる。高台からアロウサ湾を眺めマルティン・コダックスのワイングラスを片手にガリシアの伝統音学から新しい音楽を豊かな気持ちで味わえる。毎年 8 月の第一日曜日にアルバリーニョワイン祭りが開催される。第 1 回が 1950 年だから今年は第 69 回になる。カルサーダ公園に、30 ほどのブースが並び好きなワインを味わえる。私は、カバニージャが著した詩集『海からの風』*Vento mareiro* と同名のワインが好きだ。先代の社長のドゥラン氏がカバニージャスと親交があり、ワインの名前を考える時にヒントになったようだ。生産量も少なく輸出もしていないのでカンバードスのレストランで楽しむのがいい。おすすめは、アロウサ湾を一望できるリベイラ・デ・フェフィニャンス地区にあるレストラン「ポスタ・ド・ソル」で、アロウサ湾に沈む夕陽を眺めながら、新鮮で豊かな海産物をいただきながらアルバーリョの一杯は格別である。

Albariño, ouro da terra
sol que encendes os amores
almeas as corredoiras
e fas esquecer as dores.
Albariño doce e craro
meu amigo feiticeiro
heiche de beber cantando
heiche de cantar bebendo.
(Ramón Cabanillas, *Cancioneiro popular galego*, 1983, Vigo, Galaxia.　初版は *Antifona da cantiga*, 1951)
アルバリーニョ、この土地の宝
お前は愛に火をつける太陽
道を照らし
悲しみを忘れさせる。
優しく柔らかなアルバリーニョ
わが魅惑的な友
歌いながらお前と飲もう
飲みながらお前と歌おう。

ワインと太陽のメタファーは、アコーディオン奏者のマンソ Mano とその仲間たちが Olegario の土地を奏でたカンバードスのワイン巡りの民謡である。

12 山の十字架 Cruceiro do monte

石の十字架はガリシアでは神聖な場所にある。ケルト文化の名残だともいわれ、その起源は 12 世紀とされている。カバニージャスが若かりしときに勤務したことがあるカンガス市のモアーニャにある十字架はガリシアで一番美しい。その石彫はみごとなものである。カバニージャスが詠んだこの「山の十字架」はメアーニョ市コバス村にあり天に聳えている。このあたりのサン・シブラオ山はケルト人の住居跡カストロがあったところである。初出は 1926 年雑誌『ガリシア』。

Na soledade do cumes da montaña,
pregunte ó Ceo, bendecindo a Terra,
solene, maxestosa,
érguse a Cruz de Pedra.

Cando a pedra, durmida e acochada,
da Terra-Nai no garimoso seo,
esperta do seu sono milenario
e quere ser oracion e pensamento,
frorece nun varal, estendo os brazos,
e pondose de pe faise cruceiro!

山の頂の静けさの中で、
大地に祝福しながら、神にたずねる、
荘厳に　威厳をもち
石の十字架が聳え立つ。

優しい胸の中の母なる大地に
石は眠り、温かく包まれ、詠う
何千年もの眠りの中から目覚め

祈りとなり、思いとなる、
石は高くそびえ、両腕を広げ
足元から立ち上がり、十字架となる。
Camiño de TempO, 1949『時の流れ』より

13 セカの水車 o muíño da Seca en Tragove

ガリシアのリア(入り江)には 5 基の水車があった。海の水車は珍しく、潮の干満によって水車が動く仕組みになっている。セカの水車はフェフィニャンス子爵が 1622 年に建造し 1970 年代まで稼働していたが閉鎖。小麦、ライムギ、トウモロコシなど一日 200 キロを挽いていた。その後、修復工事を経て 2002 年カンバードス市の管理下で市立民俗博物館として開館。

ガリシアは水の豊かなところで、川の近くには多くの水車があったが、現在では廃屋になったところをよく見かける。カンバードス市から北に車で 20 分ほど行くとリバドゥミア市に入る。ここには 8 基の水車があり、その一つバターンの水車(Muíños de Batán)は整備されてバターン川沿いの遊歩道となっている。

もともと水車小屋は水力で穀物を挽いていたところだが、村の男と女の逢引きに使われた場所でもある。カバニージャスはトラゴベ松林を詠んだ詩がある。地名のトラゴベの起源はケルト語の語幹*brig「高さ」を意味するところから bre-が派生し、grove になり tras「後ろに」+grove〉Tragove となった。Cabanillas: *Cancioneiro popular galego*, Galaxia, Vigo, 1983. pp.120-121.には水車についての古謡がいくつかある。

Á sombra do pinal
Pinal de Tragove!
Zoador, barulleiro pinal
enraiado nas laxes fendidas
da beira do mar!

松林の影のもとで
トラコベの松林！
海辺の
引き裂かれた石に投げかけた
松林の唸りと騒めき！
Vento mareiro, 1915『海からの風』より

14 フェフィニャンスの海辺 No saco de Fefiñáns

カバニージャスの詩に Na Ribeira がある。初出はハバナに移民していたころの文学誌 *Suevia*, 1912 に「松林にて」、「海辺にて」、「カジノにて」、「居酒屋にて」からなる「三月、春よ…」のタイトルで 4 つのソネット(十四行詩)として寄稿したのが最初だ。リベイラのレストラン「ポスタ・ド・ソル(夕陽)」の食器棚にカバニージャスの詩集の初版 *A rosa de cen follas*『百葉の薔薇』1927 が飾られていた。マリーア・リアルの署名がある。聞くところによると店主のお母さんが、リアル先生の教え子ということで大事にしているということらしい。当然、リアル先生はカバニージャスとの親交もあった。リベイラからアロウサの入り江にあるノロの大岩をカバニージャスが眺めたことであろう。

Na Ribeira
Gaivotas brancas, como vellas tolas,
arredor da pulida regateira
que escabecha sardiñas na ribeiras
voan do sol ás últimas railoas.

海辺にて
白いカモメは、まるで狂った蚤、
光輝く小舟を囲み
海辺でイワシの頭を掴み取り
陽の光に向かい飛びまわる。
No desterro, 1926『故郷を離れて』より

おわりに

ガリシア語にはモリーニャ(morriña)という語がある。スペイン語にもポルトガル語にも存在しない語だ。メランコリー、ノスタルジー、ホームシック、郷愁、憂愁などに当てはまるかもしれないが、故郷を思うメランコリックな気持ちになるガリシア人ならではの言葉だ。語源は「死ぬ」を意味する morrer とさ

れるが定かではない。類義語に saudade という語がある。これはポルトガル語にもあるが、意味は若干異なる。カバニージャスは家族を残してキューバに移民して、そこで感じた心情はモリーニャであった。初期の作品にはモリーニャが詩の中に滔滔と流れているのが感じられるのは、憧憬の詩人と称され愛される由縁である。

参考書目

Cabanillas, Ramón: *Poesía galega completa*. Vigo, Xerais, 2009. Edición de Xosé María Dobarro e Xosé Ramón Pena.

Cabanillas, Ramón: *Roteiros pola poesía de Ramón Cabanillas*. 2009. Edicion de Francisco Fernández Rei e Luís Rei, Cambados.

Fernández Rei, Francisco: *Ramón Cabanillas, Cambados e o mar da Arousa*. Vigo, Xerais, 2015.

Iglesias Baldonedo, Maribel: *Francisco Asorey, escultor galego*. Santiago de Compostela, Dr. Avleiros, 2019.

Núñez Pérez, Manuel: "Alcuños cambadeses con século e medio", XXVIII abierto internacional ajedrez albariño, Concello de Cambados, agosto de 2012.

Héctor Quintela（director）: *Cen follas de arte e letras*, número 1, Cambados, 2019.

浅香武和著『憧憬の詩人ラモーン・カバニージャス』東京カラー印刷, 2011.

浅香武和編著『ガリシア 心の歌 ラモーン・カバニージャスを歌う』CD 付, 東京, 論創社, 2013.

ラモーン・カバニージャス著『百葉の薔薇・ある愛の祈祷書』1927. 浅香武和編訳, 大阪, 銀河書籍, 2019.

Resumo

O paseíño do poeta arelado Ramón Cabanillas

Takekazu Asaka

Este artigo trata dos monumentos de Ramón Cabanillas e a súa paisaxe. A paisaxe da poesía non só é unha paisaxe de alma, senón tamén unha sensación exteriorizada.

O meu descubrimento de figura de Cabanillas foi no ano 1990, dende entón case tódolos veráns fago unha visita para pasear pola vila de Cambados e a terra de Salnés para goza-la paisaxe das seus poemas: na Calzada, Consistorio, Biblioteca Luís Rei, a última casa da Rúa Hosiptal, a Praza de Ramón Cabanillas, a Casa-Museo Ramón Cabanillas na rúa Novedades, A torre de San Saturniño, o epitafio de San Domingos de Bonaval, Mondariz Balneario, o mosteiro da Armenteira, a Ermida da Pastora, o viño de Cabanillas, o cruceiro do monte, o muíño da Seca en Tragove, no saco de Fefiñáns.

（浅香武和、本学非常勤講師）